

	人数枠	資格	氏名	期間	主たる研究先	研究目的
文	前期2名 後期1名 または、 前期1名 後期2名 の3名以内	教授	芝井敬司	H13.4.1 ～ H13.9.30	1 関西大学図書館 2 ロンドン大学歴史学研究所 3 イギリス国立公文書館 4 大英図書館	18世紀イギリスの歴史家エドワード・ギボンには同名の父と祖父がいたが、これまでの資料的検討によって、祖父エドワードの商業活動の概要が明らかになりつつある。ギボン家の商業活動は、ロンドンのリネン商であった曾祖父マシューに始まるが、マシューは軍需局と関係の深い御用商人であり、その子の祖父エドワードは若い頃から政商として活躍し、とりわけ、スペイン継承戦争時には、イギリスの戦費を立て替え送金して利子をかせぐ「送金人」であった。今回の研修期間を活用して国内においては、祖父エドワードとともに送金人業務に就いた数人の商人の活動を調査し、祖父が役員として加わった南海会社の歩みと祖父との関わりを解明し、さらに上記調査をもとにイギリスの各研究機関に所蔵されているマニユスクリプトを実見することで実証したい。
		教授	八亀徳也	H13.10.1 ～ H14.3.31	1 本学 2 自宅 3 マールバハ(ドイツ)シラー国立博物館、ドイツ文学館 4 ケルン大学	ドイツ18世紀のシュトゥム・ウント・ドラングに関する文献を国内外で集めながら、18世紀ドイツ及びヨーロッパの歴史・政治・経済・社会の中でこの文学運動がとりわけ啓蒙主義との関連において、どのように位置づけられるかを総合的に見直し、さらに、具体的に詩人J・M・Rレンツの受容史を調べる傍ら、従来あまり考察されなかった以下の詩人をも研究の対象とする。 1) Chr. Fr. D. シューバルト 2) G. A. ビエルガー 3) Fr. ミュラー
経	前期1名 後期1名 の2名以内	教授	橋本紀子	H13.4.1 ～ H13.9.30	1 本学	下記の問題について集中的に知識を含め研鑽を積むため。 家計の消費行動をとりわけ実証的見地から研究する際 (1) 小標本の問題をいかに克服するか。 なかでもブートストラップ法を始めとするリサンプリングの手法によりこの問題がどのように解決されるかについて検討を行う。 (2) 変数の外生性問題をどのように扱うか。 なかでも従来明示的に扱われてこなかった変数の時系列的な性格、stationalityについて検討を行う。 (3) モデルの収束の問題について検討を行う。 従来Gauss-Newton法あるいはGauss-Seidel法による収束手法が用いられてきたが、より精度の高い収束の方法の有無、適用可能性について検討を行う。

\* 年齢及び在職年数は、平成13年4月1日現在である。

	人数枠	資格	氏名	期間	主たる研究先	研究目的
経	前期1名 後期1名 の2名以内	教授	大塚 忠	H13.10.1 ～ H14.3.31	1 自宅 2 研究室 3 ゲッチンゲン大学 4 フランクフルト大学	1990年度の在外研究のあと、研究成果をまとめるべく、研究論文の形で漸次「現代ドイツ労使関係」に係わる研究を発表してきた。 1997年に大阪府地方労働委員会の公益委員を辞し、その後の研究で自分の研究成果が一冊にまとまりそうになってきたので、この際研修員制度を利用して現地訪問も含め、様々な現状認識の確認をしながら研究の完成を果たしたい。
商	前期1名 後期1名 の2名以内	教授	明神 信夫	H13.4.1 ～ H13.9.30	1 自宅 2 個人研究室 3 図書館	教育及びその他の職務から一時離れ、主として下記の研究に専念するためである。 1. 米国物価変動会計情報に関する研究 2. 近年の米国の時価会計に関する研究 3. 中・上級の簿記書作成
		教授	横田 茂	H13.10.1 ～ H14.3.31	1 自宅 2 研究室 3 東京都 国立国会図書館 4 米国 ワシントンD.C ニューヨーク市等	先進国経済は、情報通信技術の革命の基盤としてグローバル化の中で大きく変容している。この度の研修の目的は、米国経済、殊に大都市経済の変容を分析しつつ、日本及びアジア、欧州の都市経済の変化との比較研究を行おうとするものである。私は平成9年度後期の在外研究員として米国に滞在し、調査研究に従事した。現在、この調査研究の成果を著書として公表するための作業を続けており、この度の研修の期間をこの執筆作業にあてることを希望しています。
社	前期1名 後期1名 の2名以内	教授	柴田 満	H12.4.1 ～ H13.9.30	1 関西大学 2 自宅 3 文京女子大学	数年間にわたって断片的に発表してきた性格心理学の研究、発達心理学の研究を中心にした方法論的考察を行った論文を再吟味し、まとまった著書あるいは論文として整理したい。

\*年齢及び在職年数は、平成13年4月1日現在である。

	人数枠	資格	氏名	期間	主たる研究先	研究目的
社	前期1名 後期1名 の2名以内	教授	雨宮俊彦	H13.10.1 ~ H14.3.31	1 自宅 2 東京大学文学部・教養学部 (高野氏、丹野氏) 3 チューリッヒ大学 (プファイファー氏) 4 ヨーロッパ各地	<p>現在とりくんでいる研究課題について関連する領域を研究している人と意見の交換を行い、論文、著書としてまとめるのが第一の理由である。具体的には、「視覚記号の認知科学」及び「ソシオンの理論」の資料をこなし、データをまとめ、意見交換を行うための時間を確保するために研修員となる必要がある。</p> <p>第二の理由は、比較文化デザインの資料収集のため、海外でのやや長期の滞在が必要だからである。収集した資料(写真、パンフレット類、実物など)は、環境心理学と人間工学の教材として用い(1991年、92年のヨーロッパ訪問の時の写真は環境色彩と空間形態の文化比較の教材として使用)、将来予定している論文、著書の材料とすることを考えている。</p>
総情	前期1名 後期1名 の2名以内	専任講師	小林孝史	H13.10.1 ~ H14.3.31	1 京都大学 2 大阪大学	<p>これまでニューラルネットワークの基礎的研究、応用研究を中心に研究活動を行ってきたが、今やこの技術は分散処理システム、分散処理環境やマルチエージェント技術等との融合が望まれる段階にきている。</p> <p>分散処理システムやエージェント技術等は、人口知能学会等を中心にさかんに議論されている技術であり、これらの技術に関する情報、知識は、現在担当している科目へフィードバックできるものである。よって、これらの技術に関する最新動向の調査、資料収集、研究会等の議論へ参加するため、研修員を希望するものである。</p>

\*年齢及び在職年数は、平成13年4月1日現在である。